

神奈川県社協コミュニティワーク推進モデル事業

「小地域支援にコミュニティワーク地域援助技術を取り入れるための実践」報告書



2009年3月31日

社会福祉法人横浜市緑区社会福祉協議会

はじめに

区社協の役割は、地域福祉の推進にあります。

それを達成していく上では、地域の方々による自主的な活動への支援や地域の方々と
の協働が欠かせません。点的な個別支援とともに面的な地域支援の展開により、地域福
祉が効果的に推進され、一人ひとりが主役の共に支え合うまちづくりが可能となります。

このほど、改めて地域支援のあり方をテーマとして、それに携わる職員の意識や技量
の向上を、県社協をはじめ多くの関係機関・有識者のご助力のもとに図ってきました。

本報告は地域援助技術に関する確定した教科書のない状況の中で、事務局次長を中心
に職員が試行錯誤を繰り返しながら、懸命に学習を重ねてきた記録です。思うようにい
かない点もいろいろとありましたが、結果的にかなりの成果を上げることができ得たも
のと思います。

それでも、第一歩を踏み出し種が蒔かれたところです。

今後はこの種を育て、継続的な実践活動に結び付けていくことが大切です。地域の
方々から、より一層親しまれ信頼される区社協づくりの柱として、充実した地域支援
ができるよう努めていきます。

社会福祉法人緑区社会福祉協議会

事務局長 中丸良久

この報告書の目的

私たち緑区社会福祉協議会がモデル的に取り組んだ事業の成果と今後の課題を、県社協、市社協、他市区町村社協、そして何より小地域支援の必要とされている横浜市内区社協に考察していただく事を目的に経過と実績を報告します。

事業を受け入れることになった経緯

平成19年度県社協コミュニティワーク検討会に県社協担当職員から誘われ、事務局次長がメンバーとして19年7月から11月まで参加。（検討会メンバー：県内市区町村社協中堅職員9名 アドバイザー：神戸学院大学准教授 藤井博志 事務局：神奈川県社協）

ここでコミュニティワーク事例検討の手法、事例記録の蓄積の必要性を感じ、講義、演習から検討会が報告書を作成。職場（緑区社協）では19年8月から一部を試行的に実践する。

記録・事例検討を緑区社協で行う中、なかなか実践効果が見えない状況にあたる。

県社協からモデル事業の提案があり、次の3点からモデル事業を平成20年6月に受けることになる。

- ・実践の中に研修を取り込む必要性
- ・外に報告していくことでの効果測定
- ・県社協より助成金と事務局からのアドバイスを得られる

報告書の内容

I 緑区社協の小地域支援の現状と問題点	2 頁
II 小地域支援のために具体的に行った業務	3 頁
1 日常業務として	
2 研修の場として	
3 検証の場として	
III コミュニティワーク推進モデル事業を実施してみて	10 頁
参考資料	11 頁

I 緑区社協の小地域支援の現状と問題点

緑区社協では長年送迎サービス、子育てサポート、あんしんセンター事業などの直接事業と並行して小地域支援事業として4名の職員が担当地区を一人1～4地区担当し、業務として位置づけた形で小地域支援を行ってきた。

しかし、現状として次の問題点があげられる。

- ① 担当地区制になっているが、地区のイベント、活動に顔を出す程度。
- ② 具体的にどういった支援が自分にできるか、自分が為すべきかがわかりにくい。
- ③ 働きかける対象が多種、多様で変化するため働きかけの経過および成果が見えにくい。
- ④ 目標、成果、期間が定まらない状況の中で職員固有の手法で業務が進められている。
- ⑤ 組織としての評価がなく、ワーカーとしての意欲の低下になる。

こうした現状を打破するために、職員間の合意を得て小地域支援の目標設定・経過確認・評価を、区社協事務局全体で業務として行っていこうと確認がおこなわれた。

平成19年10月から小地域支援に次のような業務を少しずつ取り入れ進められてきた。



Ⅱ 小地域支援のために具体的に行った業務

1 日常業務として 【平成19年10月～】

まずは小地域への支援の取り組みにどういった目的と経過を把握し、職場で共有するために次の業務が取り入れられた。

- (1) 小地域援助実践記録の導入
- (2) 実践の定期的（月1回）職場内検証の実施

2 研修の場として 【平成20年8月～】

支援の目的と経過をもとに、第三者も含めた中で職員が壁となっている点、今後の課題を職場内でさらに検証するために研修の場を設けた。また、実際に事例検討を数年前から取り入れて職場業務の流れに入れている宝塚市社協へも視察をおこなった。

- (1) 事例検討会研修会開催
(8月・9月：区社協・地域ケアプラザ・区役所職員を対象)
- (2) 宝塚市社協への視察研修（2月：緑区社協3名で出向く）
- (3) コミュニティワーク研修会開催
(2月：区社協・地域ケアプラザ・区役所職員を対象)

3 検証の場として 【平成20年10月～】

平成19年から具体的に行った業務の経過、成果、問題点を緑区社協内で検証だけでなく、第三者に評価、検証してもらう場を持ち、今後の業務に生かせる働きかけをした。

- (1) 市社協事務局次長会議での取組中間報告
- (2) 県社協中堅職員研修での事例報告提供
- (3) 市町村社協部会事務局長会での報告

次に、具体的にⅡの1、2、3がどのように取り組まれたかを説明したい。



1 日常業務として [平成19年10月～]

(1) 小地域支援実践記録の導入

どこの社協でも小地域支援で各地域の会合に出たときは職員が記録をつける。

しかし今回の試みた記録は日報形式で、次のねらいとルールとエクセル入力での書式で担当地区ごとに行われた。

<ねらい>

自分のかかわり方、地域の反応を客観的に考察できる
経過を中期間ごとに見ることによって課題を抽出できる

<ルール>

- ① 出席・参加した会議、イベント、相手との調整を記録
- ② ①に入る前の目標と入った経過の概要を入力
- ③ 自分の所感を目安 100 字以内で入力

<書式>

地区社協支援実践記録

NO.	年	月	日	時間	地区	会合名称	記録職員	場所	③プラン (目標とすること)	④プロセス (報告書等別にある 場合は ★印)	⑤モニタリング (所感、展望など プランと比較して)
1											

この日報を見た時、1 ヶ月～2 ヶ月単位で見たとき地域の流れ、職員のかかわり、思いの動向がはっきりとするメリットがある。また、会議記録ではない地域のキーパーソンとのやり取りも記録され、関わりがより鮮明に伝わった。

デメリットとしては、習慣化されていないこの日報方式は、直面する業務の後手に回り、ためて入力する職員などもでてきた。ある職員は会議記録を日報と同じ項目にし、それを貼り付けるという工夫をみせ、月例の全体職員会議を入力期日に各職員が足並みを揃えてきた。

(2) 小地域援助実践の定期的職場内検証を実施

緑区社協では月に1回2時間の全体職員会議がある。この会議の中の45分程度を活用して、次のねらいでかかわっている地域の経過報告を実践記録にもとづいて行った。

<ねらい>

- ①自分の取り組んでいる成果、つき当たっている壁を報告する。(気づき)
- ②意見交換していく中で次への取り組みのヒントを得る。
(組織として課題共有・課題解決)
- ③他職員の実践を自分の担当地域へのヒントとする。(実践例から手法の学び)

この検証こそが職場内で地域の取り組み方の共有や、アイデアを出し合う場であった。

メリットとしては報告する職員も報告していく中で自分の関わりが見えてくるという点があった。デメリットとしては意外と他地区の他職員のかかわりに積極的な意見が交差しないという点、これは進行者（管理職）の力量もある。しかし、ここで地域担当の意外なプライドが作用していることに気づいた。これは職員同士が互いの考えをまずは承認し、任せて協力できるところをフォローとするがゆえで、業務分掌にもみられる状況が小地域支援でも現れたのだった。

<地域支援におけるプライド>

職員と管理職では小地域支援に関しては記録、相談の中で職員の地域への思い、働きかける手法への確信をよく聞くことがある。直接事業に忙しいと普段は地域にかかわる時間がないとなげいている。こうした点いかにも地域福祉事務職員というイメージだ。しかしながらいざ小地域にかかわると、自分の地域への期待、当事者ニーズを地域で解決したいという思い、自らの手法へのこだわりが強い。

やはり思うように地域に出向けていなくとも、社協職員として地域にこうなってほしいという思いは誰もがいだいており、逆に自分なりに関わっている自負が強いという新たな発見と今後への期待を感じられた。

→事例検討会に取り組む
[20年8月]



2 研修の場として [平成20年8月~]

小地域への取り組みを記録化し、職場内での検証の力量をつけていくためではあったが、緑区社協では初めて取り入れたため、まだある程度ぎこちない進められ方をしていた。

これを解消するため、神奈川県社協が現在取り入れている手法として（１）事例検討会を計２回、（２）宝塚市社協への視察研修を１回、（３）コミュニティワーク研修会を１回行い、職員へ小地域支援業務の意識と技術の向上をはかった。次にこの４回の研修を分析する。

（１）コミュニティワーク実践研修会の実施

① 第１回 事例検討会 [平成20年8月1日]

「Ｙ地域支援について」 報告者 緑区社協Ａ職員

参加者：緑区社協・他区社協・横浜市社協職員 計９名

コーディネーター：田園調布学園大学 村井教授

② 第２回 事例検討会 [平成20年9月2日]

「Ｄ地域支援について」 報告者 緑区社協Ｂ職員

参加者 緑区社協・他区社協・横浜市社協職員、地域ケアプラザ職員

区役所職員 計１５名

コーディネーター：沖縄大学 西尾准教授

この２回の事例検討会はいずれとも次の手法で進められた。

<ねらい>

支援記録をまとめる効果と他職員・助言者からの支援計画再構築をおこなう。

<手法>

報告者が自分の取り組んでいる担当地区への支援をもとに次の内容をまとめ、参加者と事例を共有しながら今後の展望を答えとしてではなく、担当者への参考となる形にしていく。

報告者の提出する事例項目

事例タイトル 事例概要・ポイント 検討したいこと 今後の展望 地域概況
人・団体・機関の関係図 事例経過（実践記録）

事例全体の振り返り・事例をまとめて気づいたこと

事例検討の中で職員が何処をねらっているのかをみなで考えることが小地域支援の社協の蓄積になると感心した。しかし、事例経過は日頃の実践記録から引っ張り出せるものの、一方で地域概況、関係図は意外と担当者が日常に把握しているものでなく、頭の中で描いている。ゆえに資料作成に思わぬ力量と時間がかかった。それは日々の業務

で数値的に地域分析していないことがわかる。

つまり、地域アセスメントが不足している。地域への関わりへの共有はしているものの、緑区社協として一番弱点としている地域全体への支援目標の不明慮さ、管理職としてもそれを整理していないということがはっきりした。こうした弱点を今後どうしていくかもあわせて課題は大きくなった。

（２）宝塚市社協（兵庫県）への視察研修

コミュニティワーク事例検討、実践記録をスムーズに業務の中で取り入れている社協はないかと探していたところ、宝塚市社協を紹介された。コミュニティワークを実際に肌で感じるために緑区社協職員複数名での視察を調整、３名で次の日程と内容で実施した。

視察日程：平成２１年２月１３日（金）

9:30～12:00 宝塚市社協 事例検討会／13:00～16:00 宝塚市社協 ヒアリング

① 事例検討会「〇〇地区の生活相談窓口における専門職間の連携について」

思いがけず事例検討会のメンバーとして仲間に入れてもらい、一緒に事例を検討する経験をさせていただいた。

- ・ 事例検討の流れがスムーズで、時間通りに進めていく配慮と経験が職員全体にあった。
- ・ 事例提供タイトルはどんな内容でも、どんな期間でもよいといった融通の利くルール。
- ・ 事例提供のワークシートは統一したフォーマットでおこなわれている。
- ・ 気負ってなにか答えをだそうというのではなく、悩み考えを共有しその上で導き出すイメージ。
- ・ 月１回２時間半で行うことが、業務の一環で定着されている。

私たちが取り組んでいた事例検討とは異なり、２時間半で自分たちの普段の地域支援の事例を、長期、短期、内容を問わずに全員で進行、助言、記録を受け持ちながら行われているのには感心させられ、これは担当している地区の課題はみんなの課題という意識と、検討をしていく経験からのもので、緑区社協も経験を積むことが大事だと感じた。

② ヒアリング（多くは取り組み体制づくりを中心に）

使用している様式類とその運用方法を解説していただけた、緑区社協での導入を描きながら伺うことができた。特に下記が印象に残っている。

- ・ 記録以前に地域ごとに市社協全体と共有した重点目標からの地域ごとの支援目標をもっている。
- ・ 組織長そのものが、記録を把握しその中で小地域支援の進捗状況を確認、検証している。それが、職員の業務評価ともしている意識がある

ヒアリングに関してはもっと数多く具体的なことを聞き、それをここでは紹介できないのが残念だが、とにかく全員が自分たちの行っている地域支援に自信をもっている様子。かつそれが他を寄せ付けなない感じは全くなく、かえって和やかな雰囲気であったという点。これを、緑区社協に持ち帰れたことは大きな実績となった。



[宝塚市社協の視察]
←事例検討会の様子
{21年2月}
ヒアリング協力
してくださった皆さまと
緑区社協一行→



(3) コミュニティワーク研修会でコミュニティ援助技術を本質から学ぶ

コミュニティワーク実践研修会 [平成21年2月24日] (※事例検討会とあわせて通算3回実施)

第3回 講義「コミュニティワークの専門性の理論と技法を学ぶ」

講師：神戸学院大学 准教授 藤井博志氏

(全社協地域福祉推進委員会 小地域福祉活動に関する調査研究委員会委員長)

参加者：緑区社協・県・横浜市・他区区社協職員、区内地域ケアプラザ職員、
区役所職員 計22名

内容：コミュニティワークの専門性とは (日常業務での視点と技法を中心に)

自分の関わっている個別支援、コミュニティワーク活動を講師と参加者で検証する。コミュニティワークの本質、記録、事例検討という技術を必要とされている現状について講義、ディスカッションしていただいたが、ここでは参加者の感想でまとめた。

今始まったかのように「地域福祉の推進」がクローズアップされているけれど、半世紀以上の歴史のある社協が当初から進めていたはずではないでしょうか。でも、小地域や地区社協を支援する仕組みを作ってこなかったこと(ある程度の支援はあったものの)からすると、コミュニティワークはこれからの区社協の役割としてしっかり確立していく必要性を実感しました。また地域福祉計画策定にあたり、どこに視点を置くかということが確認できたことも大きな成果でした。(Aさん)

地域支援は「3年間で地域を見て、5年目で事業ができる」「市民感覚を持って支援しなければいけない」という言葉が印象的でした。事業をしてもらうために、説明、記録、分析が必要という話に今自分の抱えている地域支援の課題に助言がいただけたようです。(Bさん)

個別支援と地域支援の関係や違いが理解でき、社会福祉の開発性や記録をつけること・記録を活用した検討会を定期的に開催することの大切さが実感できた。

特に「コミュニティワークの理解(目標とプログラム)」「住民主体」が勉強になった。(Cさん)

記録の重要性について実感し、また他者に自分の活動を伝える難しさを痛感しました。ケースワーカーは記録が短くても適切であり、私のような職種はズラズラ書いてしまうというのは耳が痛い話で、記録の訓練が必要だと思いました。(Dさん)

社会福祉協議会の役割は「地域福祉の推進」です。「地域福祉の推進」と簡単に言うけれど、具体的手法もわからず、その専門性や社協が実施することの意義もあいまいなまま日々の業務に取り組んでいました。

今回の講義を聞いて、「コミュニティワーク」のとらえ方や専門性を持たせる方法、体系的に作り上げるために必要なことなど、とても勉強になりました。それらを日常業務の中にどう取り組んでいくか、できるところから頑張ります。(Eさん)



←藤井先生からコミュニティワークを学ぶ
[21年2月]

3 検証の場として [平成20年10月~]

平成19年から具体的に行った業務の経過、成果、問題点について、緑区社協内で検証だけでなく、第三者に評価、検証してもらう場を持ち、今後の業務に生かせるよう働きかけた。

- | | |
|-----------------------|-------------|
| ①市社協事務局次長会議での取り組み中間報告 | 平成20年10月21日 |
| ②県社協中堅職員研修での事例報告提供 | 平成21年 3月 2日 |
| ③市町村社協部会事務局長会での報告 | 平成21年 3月 6日 |

Ⅲ コミュニティワーク推進モデル事業を実施して

およそ1年半にわたり、実践記録と職場内での検証、視察を含めて4回にわたる研修会と取り組むなかで、小地域支援にはやはり、コミュニティワーカー(支援者)の支援の目標設定、・記録・事例検討・地域分析がなければ効果が見出しにくいことが再認識された。

今後の対応策の一案として次のとおり提案したい。

- ① 区社協の組織がコミュニティワークの基礎業務として業務に位置づけること
- ② その業務の評価測定を、職員の業務遂行評価と結びつけること
- ③ コミュニティワーク援助技術は確かに未開拓状況であるが、区社協として開拓の率先と立場の意識を持ち、地域ケアプラザ、行政に普及していく意識をもつこと
- ④ 未開拓であるがゆえにその研修、研究の場を組織として設定し、職員の資質向上を目指すこと

横浜市の場合、いま市計画でも地区別計画の必要性が掲げられている。

この計画の推進に行政などに出遅れず、逆に真に住民主体での展開に引っ張っていくためには、こうした“地域の意識と分析と関係性”は社協職員に聞いてこそ内実の伴う状況にすることが、社協の存在意義を示す一番の方策だと感じた。

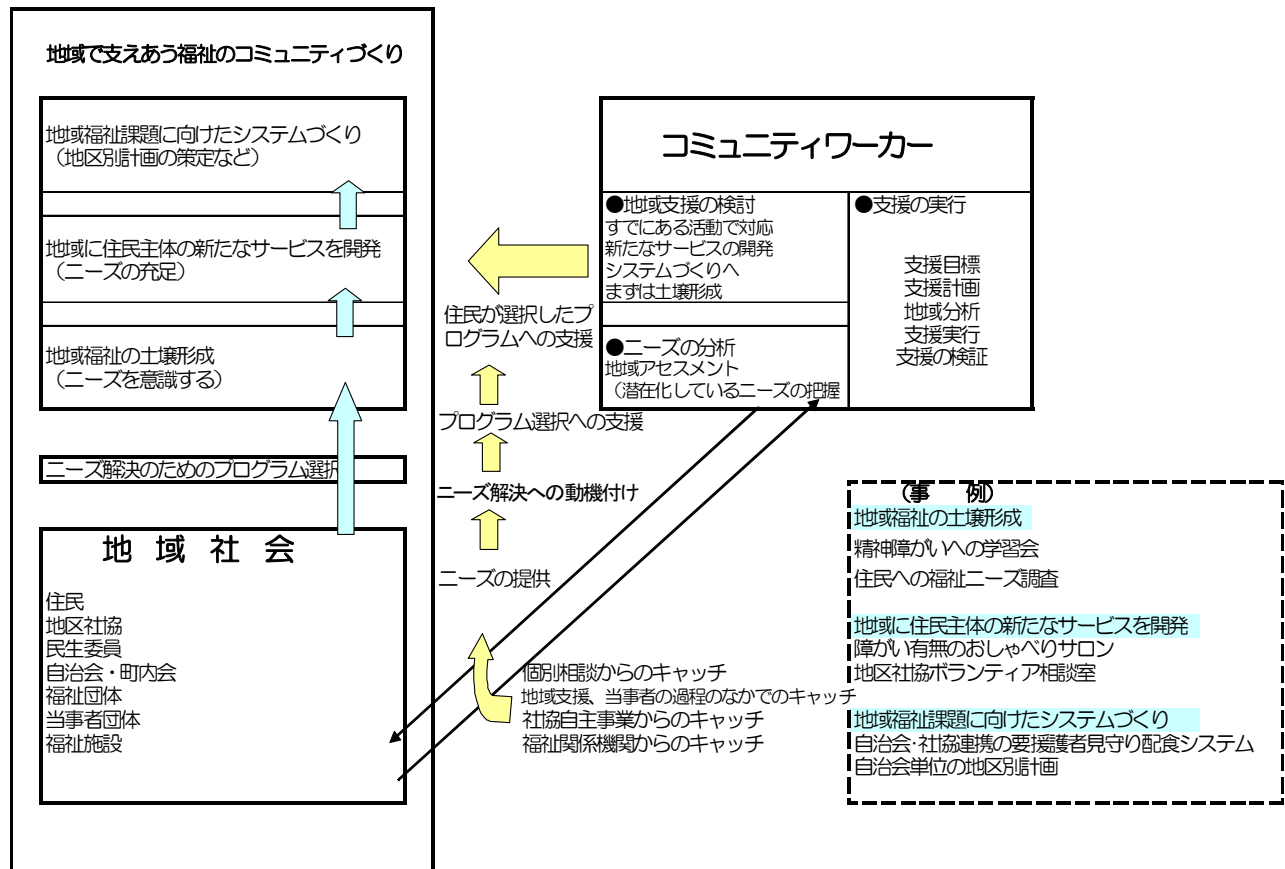
最後に区社協職員の内部での業務の役割とワーカーのあるべき支援を図式化してみたものを紹介したい。

コミュニティワークのイメージ図

区社協でコミュニティワーク(Cow)の視点を持ち業務するうえでの役割

業 務	小地域別に支援目標・計画を策定	支援計画にもとづいて業務を遂行する	支援業務を職場内で検証し組織としての業務分析振り返り評価をする	コミュニティワークを遂行するための人材育成
事務局長	組織としてCow運営方針をいれる CowをチームとしてすすめるためCowとして職員の意識統一	職員が動きやすい環境をつくる 管理職が現場に必要がある場合支援に直接参加	業務評価に支援評価を位置づける 支援分析、振り返り、評価を組織として行う	事例検討・Cow研修の必要性を持ち業務向上の場として位置づける
事務局次長	支援目標・計画の協働作成 支援目標・計画の管理	支援記録の管理と進行確認	支援状況定期カンファレンス(月1回)を職員全体で行う	事例検討会の実施(月1回) Cow援助技術研修の実施(年2回)
ワーカー職員	支援目標・計画の策定 策定に必要な分析として ①地域分析 (人材・福祉資源・歴史・関係図・現状活動) ②今までのかわりからの分析 ③担当者主観での地域分析 目標計画に変更が生じた場合の提案	支援計画に即した業務分析のため ①支援記録を日報でつける ②次長に報告・連絡・相談	①記録にもとづいた定期的な検証と業務分析を提示する	①自分が課題としている事例を事例検討会に提示 ②Cow援助技術意識した研修への参加
中堅職員	目標・計画設定、遂行を実施していく中で他職員のアドバイスをしていく		業務中の日常会話の中でも検証する	事例検討会などでも率先した報告者

参 考 資 料

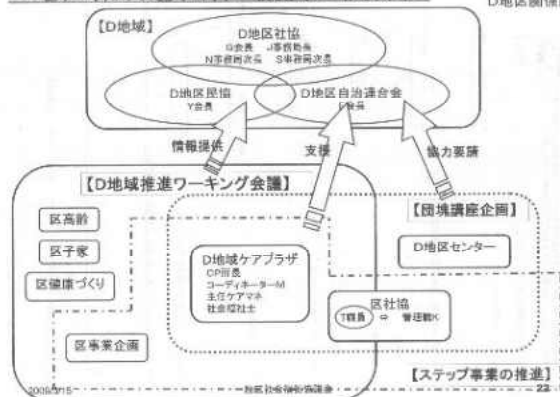


緑区社協での様式類（実践記録／事例検討会資料）

N.O.	年	月	日	時間	地区	会合名称	記録職員	同席職員	出席者	場所	件名や調整相手など	③プラン (目標とすること)	④プロセス (報告書等が別にある場合は、★印)	添付資料	⑤モニタリング (所感、展望など) プランと比較して
1	2007年	11月	4日	10:00 ～ 12:00	D地区	D地区まつり	T職員		D地域ケアプラザ職員	D駅北口周辺		D地域の主だった活動者の方々に、区社協、ケアプラザで、ボランティア講座を企画していることを知ってもらう。また、担当者の顔を知ってもらう。	開会式から参加し、D地区まつりを知る。活動者の方々と、直接話のできる機会を得る。		J地区社協事務局長の仲介があり、E自治連合町内会会長、G地区社協会長と話しかけた。D地域では自治会、地区社協、民生の3者が非常にいいかたちで連携できていることを知ることができた。
2	2007年	11月	15日	18:00 ～ 15:00	D地区	D地区社協ヒアリング	T職員		D地域ケアプラザ所長・職員	D地域ケアプラザ		D地区社協がどのような人材を必要としているのか、また地域のどのような点を課題と考えているのかを知る。	G地区社協会長、J地区社協事務局長に対してのヒアリングを行う。その中で、現在企画中のボランティア講座をお伝えし、協力を呼びかける。		定期的な活動がないことから、地区社協で新たな人材を受け入れていくことの難しさを知ることができたが、また一方では地区社協独自の人材を必要としているという潜在的なニーズも知ることができた。

項 目	D 地 区	綠 区 全体
1. 住宅地	1. 住宅地	1. 住宅地
2. 商業地	2. 商業地	2. 商業地
3. 工業地	3. 工業地	3. 工業地
4. 公共用地	4. 公共用地	4. 公共用地
5. 農用地	5. 農用地	5. 農用地
6. 森林地	6. 森林地	6. 森林地
7. 水域	7. 水域	7. 水域
8. 未利用地	8. 未利用地	8. 未利用地
9. 其他	9. 其他	9. 其他
10. 合計	10. 合計	10. 合計

D地区概況③団体・機関の関係図



◆事例タイトル

本当に地域の人が必要なサービスを地域の人で調査・発見・共感するという『過程』を踏み、地域の人で必要なサービスや仕組みを作る。(A地区)

◆事例概要・ポイント

[illegible]

◆検討したいこと（ワーカーとして困っていること、答えを出したいこと）

- 検討メンバーの増員
A地区社会協会は事業協力者は必要としているが、検討メンバーを増やすことを望んでいない。
また、H社協賛員もこの人なと思う人を地域でみつけられない。
このような状況の場合、どうすべきか。
- 聞き取り調査対象者の選定
さらに聞き取り調査をする場合、どのような世帯を選ぶべきか。
- 聞き取り調査にあみだた問題がある世帯への支援
聞き取りの中から、数件でもか問題がある世帯があった。このまま何もしないのか。

◆今後の展望（今後の取り組みの方向性）

- ・A地区社協会長に検討メンバー増員について納得いただき、企画検討会メンバーや聞き取りをした民生委員の中で民生サービス事業に関心のある人を探していきたい。
- ・ケアプラザやワーキング会議から情報を得て、福祉課題のありそうな世帯をみつけていきたい。
- ・地区内にあるボランティアにつなげたり、民生委員と協力してさらに踏み込んだ調査をしてその世帯に必要な支援を考えていきたい。

◆事例全体を振り返っての所感、事例をまとめて気づいたこと

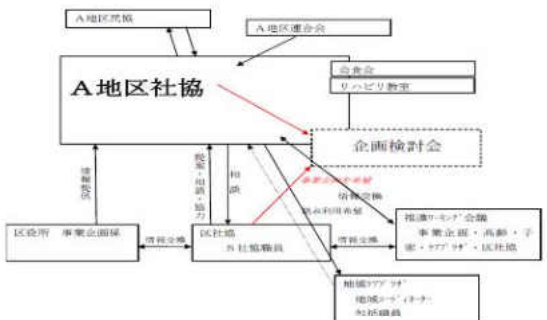
普段私は自分の担当する事業についてあまり上司や同僚と相談などはせず、自分の信念や感覚で勝手に進めてしまう傾向があるので、この記録をつける作業というのは、一旦停止し、暴走を食い止める歯止めにもなっていて、大いに助かっている、と思う・・・。

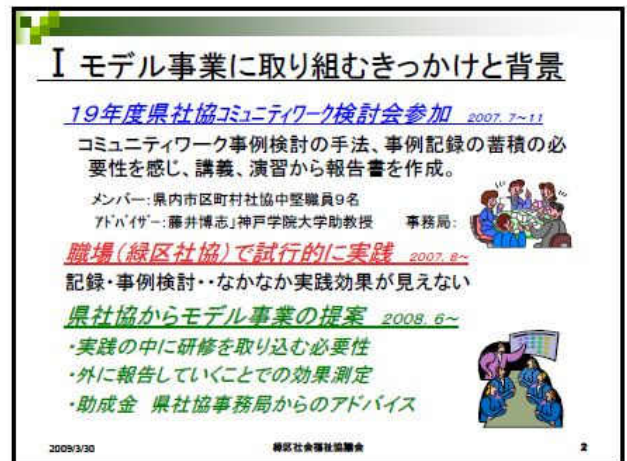
また、事とめていて内容を振り返ったとき、経緯はどうあれ、「宅宅サービス事業」を始めようとした会長の意思を生かされなければならなかったことを大変申し訳なく思った。それでも一緒に事業を進めてくださる会長の寛大な気持ちに常に感謝を払い、会長も納得していただける事業展開をしなければならなかったと思った。

◆ 地域類型

①基礎子一夕

項 目		A地区	N区全体
人 口	H20.9月	〇〇人	175,675人
世 帯 数	H20.7月	〇〇世帯	55,040世帯
自治会数	連合会加入	〇〇	110
H20.7月	連合会未加入	〇〇	7
高齢人口65歳以上	(高齢化率) H20.9月	〇〇人 (〇.〇%)	30,282人 (17.24%)
ひとり暮らし高齢者数	地区別	〇〇人	—人
独り暮らし高齢者数	地区別	〇人	—人
要援心身障害がい者数	地区別	〇人	—人
要援障害者長期療養者	地区別	〇人	—人
要介護認定者数	H20.4月	〇〇〇人	4,478人
児童数 (0～14歳)		〇〇〇〇人	26,239人
民生委員・児童委員数	H20.12月	〇〇人	213人
福祉・教育施設 及び事業所数	児童関係	保育所、幼稚園、小学校 中学校、高校、こどもセンター 障害者関係 高齢者関係 その他 関連施設等	障がい者グループホーム178-18型 介護療養型医療施設 地域ケアセンター、21-240人、 緑ヶ丘センター





小地域援助実践の定期的職場内検証を実施

毎月1回の職場ミーティング(2時間)において
1地区について担当者1名が実践記録にもとづき経過報告を
する(45分) 2~3か月のかかりの中で...

＜ねらい＞

- ①自分の取り組んでいる成果、つき当たっている壁を報告する。(気づき)
- ②意見交換していく中で次への取り組みのヒントを得る。(組織として課題共有・課題解決)
- ③自分の担当地域へのヒントとする。(手法を他職員から得る)



2009/3/30

緑区社会福祉協議会

7

小地域支援事例検討会の実践

08'8月1日 Y地域支援

報告者 緑区社協A職員

参加者 緑区社協職員・他区社協職員

コーディネーター

田園調布大学 村井教授

08'9月2日

D地域支援

報告者 緑区社協B職員

参加者 緑区社協職員・他区社協職員

地域ケアプラザ職員

コーディネーター

沖縄大学 西尾准教授

- 事例タイトル
 - 事例概要・ポイント
 - 検討したいこと
 - 今後の展望
 - 地域概況
 - 人・団体・機関の関係図
 - 事例経過(実践記録)
 - 事例全体の振り返り・事例をまとめて気づいたこと
- ＜ねらい＞
支援記録をまとめる効果
他職員・助言者からの支援計画再構築



2009/3/30

緑区社会福祉協議会

8

D地区概況① 基礎データ

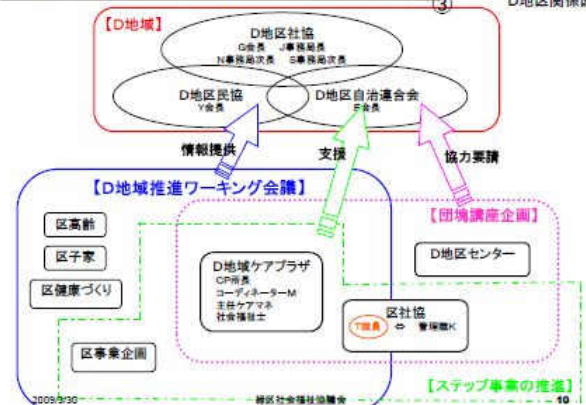
項目	D地区	緑区全体
人口(世帯数)	※H19年9月 34,346人	174,180人
自治会加入世帯数	11,389世帯	55,040世帯
高齢化率	※H19年9月 14.31%	16.57%
町内会・自治会数	議会会加入	26自治会
	議会会未加入	1自治会
民生委員・主任児童委員数	議員46人 (民生員40人・児童員6人)	議員211人(次員2) (民生員189人・児童員22人)
	3団体	45団体
区社協VCG登録のVG数	あり(年20回)	実施11/11地区
地区社協 高齢者会食会	なし	5/11地区
地区社協 配食活動	なし	5/11地区
地区社協 ミニデサービス	あり(年20回)	3/11地区
地区社協 地区リハビリ教室	あり(年11回)	8/11地区
学校数(公立のみ)	小学校	3校
	中学校	1校

2009/3/30

緑区社会福祉協議会

9

D地区概況③ 団体・機関の関係図

研修の場としてⅢ-3
D地区関係図

2009/3/30

緑区社会福祉協議会

10

コミュニティを实际肌で感じるために 宝塚市社協(兵庫県)へ視察研修 2月13日(金) 午前中 事例検討会参加

事例検討の流れがスムーズで時間通りに進めていく配慮と経験が職員全体にあった。

- 事例提供タイトルはどんな内容でも、どんな期間でもよいといった融通の利くルール。
- 事例提供のワークシートは統一したフォーマットでおこなわれている。
- 気負ってなにか答えだそうというものでなく、普段の自分の悩み考えを聞くといったイメージ
- 月1回行うことが定着されている。



宝塚市社協視察「ヒアリング」から

記録のつけた
支援目標の設定方法
支援の評価方法
管理職のスーパーバイズ
他機関との協働方法



所感

管理職と職員、また職員同士の会話から感じたのは 全員が自分たちの行っている地域支援に自信をもっている様子。
かつそれが傲慢な感じではなく、かえって和やかな雰囲気であったという点
お互いを認め合い、かつ地域からも信頼されているという自負があるから
こその雰囲気であったように思われる。

IV 第3回コミュニティワーク研修で コミュニティ援助技術の本質から学ぶ

- テーマ 「コミュニティワークの専門性の理論と技法を学ぶ」
- 日 時 平成21年2月24日(火)13:30~17:00
- 場 所 ハーモニーみどり2階 多目的研修室
- 講 師 神戸学院大学 准教授 藤井博志氏
(全社協地域福祉推進委員会 小地域福祉活動に関する調査研究委員会委員長)
- 参加者 県・市・区社協・地域ケアプラザ
区役所22名
- コミュニティワークの専門性とは
(日常業務での視点と技法を中心に)
- 自分の関わっている個別支援、
コミュニティワーク活動を講師と
参加者で検証する



V 小地域支援の問題点を解決できたか

実践記録・職場内検証・事例検討の成果として



- | | |
|--|--|
| <p><現状></p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 担当地区制になっているが、地区のイベント、活動に顔を出す程度 ■ 具体的にどういった支援が自分にできるか、自分がすべきかがわかりにくい。 ■ 働きかける対象が多様、多様で変化するため働きかけの経過および成果が見えにくい。 ■ 目標、成果、期間が定まらない状況の中で職員固有の手法で業務が進められてしまっている。 ■ 組織としての評価がなく、ワーカーとしての意欲の低下になる。 | <p><成果></p> <ul style="list-style-type: none"> → 支援目標を念頭に置いた地域への関わり(会合の出席、イベントへの参加等)になった。 → ①により自分のできる、すべき支援が見えてきた。 → 記録作成、マップ作り等から地域の関係性働きかけの成果・失敗が明確になってきた。 → 職場内検証により、担当者の地区への働きかけの意図が見え、職場全体で地区へどう働きかければよいかの共有ができた。 → 事例検討などにより、職員の働きかけの成果が評価され、ワーカーの意欲向上につながった。 |
|--|--|

2009/3/30

緑区社会福祉協議会

14

VI 推進モデル事業実施の課題

組織の7つの変革



- 1 社協職員はコミュニティワーカーであるという意識を強く持つこと
- 2 そのために社協はこれだという地域援助技術を個人技でなく、**組織技**として持つこと(日常業務に確立)・・・職員が小地域支援の業務が楽しいなと感じるように。
- 3 援助効果を**組織として評価し**、職員のやる気を引き出す、外部評価を受ける
- 4 記録・検証のみでなく、**職員の日常業務の会話**から小地域支援を意識しあう
- 5 プラザが小地域最前線といえどもできるだけ**同じ目標をもって互いの特性を生かした協働**の小地域支援をすること
- 6 地域援助技術を組織技として進めて行くにはどうしても時間と労力は必要。今ある**事業を整理**し時間を作る
- 7 何よりも管理職に**スパーバイザーの能力**が必要！
部下の業務を分析・ほめる・整理する・助言する・時に任せる……。

2009/3/30

緑区社会福祉協議会

15

VII コミュニティワーク推進モデル事業の展望



緑区社協の展望

目標設定・記録・事例検討・地域分析は職員のやる気、いっしょく組織の業務として位置づけていく(事業計画に盛り込む)
宝塚市社協のように経験を積む事が財産、目標を組織と個人で共有し、**楽しみながら**地域支援できる職場の環境をつくる
すぐには変わらない、でも少しずつでもベストでなくベターな小地域支援に変わっていく

横浜市社協への期待

21年度区社協機能強化の取組「小地域支援の取組強化」
よこはま社協力向上に関する検討会議

神奈川県社協への期待

コミュニティワーク推進は社協の生命線

「モデル事業」の継続を切望します。

神奈川県社協コミュニティワーク推進モデル事業

「小地域支援にコミュニティワーク地域援助技術を取り入れるための実践」報告書

2009年3月31日

社会福祉法人横浜市緑区社会福祉協議会

横浜市緑区中山町413-4 ハーモニーみどり1階

TEL: 045-931-2478 FAX: 045-934-4355